鷹口傳書

二

ワ多10
552
2

類聚鷹歌抄

上巻　鷹　鳥

下巻　鷹將　犬雫　器物

後京極　百首

棋政家　三百首

西園寺　百首

近衛家　百首

定家卿　三百首

慈鎮大僧正百首

近衛家の百首を詞乃えとして類詞

を聚して添

京都帝國大學圖書

鷹

近 鷹の根元

日 たし鷹 七十四

壒嚢抄 天竺摩伽陀国清来といふ人唐へ来りて養由道の業にて仕候也日本へては仁徳天皇の御時保昌卿始てまちかね御ゆるし出し彼仁鷹をとらす瑞ならしたん

雪白ハ天竺渡りし玉の鳥出来すなれは
はし鷹といふ事大鷹小鷹によらす鷹の總名と可得心事也鶴をとりし鷹といふ説もあり口傳在之 八十二段にあり 箸鷹と云ふ文の説無に古来より御来りある麻らしれ箸をとりて其鷹を焼房より出もこぬ炬火にして火をとりしれる出もそこよりてたし鷹といふ也 或鷹の書に四月八日に鷹をとる屋へ入七月十五日覆盆の箸鷹

門 ヲ.10 巻

きいまり川よこしらへ甚夜とやよりも出まて
源之御霊の事也鷹によりまたやく
毛をおとして出来もあり　其定の如く
鍛冶必要の十五日の夜鷹屋より出るは
定之へうしけるまや　たし鷹とは大
鷹小鷹ふよらし次鷹此悪名を源之
子細を被仰よ　百日のあらしといふんなる
へし　百日の鷹ハ小鷹の悪名をもいつも
後京極子文始之事也　四月鎌倉殿へ以進
七月十五日より無ふおろし御鷹を七帳為へ
まつりして甚大の新めく鷹屋よりも
出来也　西国二十三所にまいるや　甚鷹屋より今年
なるも卯月八日より以来毎も七月九日より雪ろ矣
の鷹を姫出よりもこく夜也也　御之もし
鷹といふ一説也　又波斯国よりもいふ事

字書紀福もの鶴の字をといひ鷹をもよし
鷹ともも訓ヨハ様々の説あり
延徳六年二月に出るなり

按段
八掃　二百五十七羽為此　むらしとろこしよりも出え
しらう鷹八為ひまて大寒へ渡るとも也
慈法年正月廿日の鷹ハ　後京年八月九日鷹

迚
おらし鷹　辛二月おらし鷹も

日
栗鷹　辛よりのこふ
按段に梅之え　宝永十二年の日此
大君日向栗鷹の津とすなるへし
日様東国北方にも栗鷹も西国に多事
もいふてともまた多の　日本二ツ　日向の鷹

日
弁慶栗　七十四羽有百五十羽
此名鷹は日向栗とて
弁慶栗を不知　栗肉の色ハ一切と之鍛を
仰得んても　甘いる栗　物事ちの鍛の
すは心えらし中納に　また枝から八猪も

ゐる歟也かくのことくなる鷹なし　波（浮）ゐて
も大切にあるゆへに其のかたちかわりたる鷹
兄鷹によりて須奔走近所するなり

近
巣こもり　年中鷹中ノ柳
同
巣くゞり毛　年三つ可川ノ　毛の前ニ在
同
巣まわし　年二集ゟ　巣鷹をいふ
同
巣おろし　年三つ可川ノ　巣の中よりおろしたる也
桜波
古巣へ入　十　年々むつき正月廿一日より巣に入也
後京
巣わた鷹　年　を養ひ　巣まはりのやを
鷹ハ手ニ据る毅　　縋りの鷹に蹶まて尾
のさきにわたるやうにて見あるなり
定家卿又瀬山本の　　親に随しかひまて巣に
いふそれを後ニは云しなり
定家
巣さかり　年又生れる　巣の中にゐて飛鷹

近
定家
おくれ　巣ごし　此年也　十又子ハ鷹あり
年よひの本柳　よき鷹也　黄毛とも書
巣鷹　此の鷹を繋ぐ　御所にて　同年二集ゟ柳
後京卿　旅鷹
宇も納得ぬかり
西園寺十二さいのときいひ　　当年此の鷹毛納よくけ
ての鷹の廻さらにくもある此鷹をおくれと
中頃よりいへり　　　葦鶴十又未毛にも
同
片鳥屋　十二山家より
後京
ひとつけ　八十も　秘蔵して　片とやかけ
定家　九千にとや出る
同
とろとや　十二山家より柳
桜波
とや越毛　年九とやありし　片毛よく八調えた　色あて
同
古とや
十二山家又柳　わかり毛の落かね　年々くゝ毛の数有り
同年十一島屋　がとや

一 し

近
鳥屋数経す 摂政 鳥屋鷹 卒三 秀扇鷹の 字一 秀扇数と 無〇毛の数まりたる鷹なる 鷹道は扉のこ 秀の鷹子也

日
鳥屋出の鷹 西国 とや出も 廿二あまりしや へし古しやなり 五十八才(ちま)段 鳥屋出し古鷹や いまた居別 次足草をむつしかり足草川とするや 装鳥屋に入る事也

秀扇まさり 八十四年くに 秀扇出よりれ乗逸地する事 なり

定家
秀扇之日 二百四十九才の好くも 笑〇しても[illegible]しぬと

日
野出 七十二年は 稽は後わきても柳に屋り経為紙 いふり
後京一山中 喜とかくる鷹をいふ
慈鎮 卒文御鷹人 日四十毛 柳おつて 日九十一 されたるにや

一 し

定家二百七十六首 しつかき鷹のこまて久しく形 よそにしてつつみも形さわりく旅亭か 秀まし〳〵ぬ也

近
しらふ 一御年せし 毛とかへる秀扇を出るをいふ秀鷹 かへり
定家二十六首 鷹の 稚くの山に浴るをいふ

日
山かへり 七十一首 鷹は 山まくも毛とするをいふ 日七十二集 西国十八にあれども
後京廿一 隻持の 日九十一首 鷹は
慈鎮二十文 はかり人

定家
古山かへり 二百五十二 十と首とも

日
小山かへり 七十二首 鷹は 節ふらして打れとしる鷹をいふ
定家十九 足吸の 二月三月に出るをいふ

日
初とかへり 卒一集 [illegible]抄 後京四十一 旅狩家

日
片とかへり 日右

日
もろかへり 日右

近
日 とやかへり 七十一集より抄
日右 節かへして妻手かへしたる鷹をいふ
佐保姫の里 春のあしたか也 春三月の日にかへりたる鷹也
浅家 さほ姫鷹 三 春(?)いへり
いふ
定家 木葉かへり 定家三十八 松かえや春の鷹は老鷹や
日 ものかへり 二百四十九 もかなくて秋の野の 小鷹二十四 末は出
日 もろかへり 三 春宿(?)にもかへりしてはしらまたかへりを
いふなり まして諸鷹の御前にて
西園廿二 いはまといふや もろかへすまはのひてと鷹
ましらの鷹を なしとよむことをいふなり
まさる鷹也 三代集十二部よりに
日 たかへい 十二山海よ 当流秘事として
日右
若鷹

近
日 山かへり 七十二集より抄
日右 七十四 雲より抄
西園五十八 山かへり人 嵯峨野にて鷹かへるといふ
弟鷹 弟鷹と弟と兄鷹と字は
訓ましは弟之 弟いふ故り訓鷹は又弟
年を弟で八兄を縮きとはいひし
日 兄鷹
日右 兄鷹と弟と せうとよむ兄は訓
まし兄弟也せうといふ兄 訓也 姐弟を兄
年と弟也 せうとよむと訓一しと也
日 手子
日右
日 白鷹
日右
日 鶏
日右
むかし仁徳天皇御治世之時に相者は
彼雛子をも宮やとらて保昌にといふ
ところ一国の鷹狩にて日本へわたつて
此雛子と合わせ彼化の二つは別ちやく
鷹に鶏といふ鷹彼国は是は二つはうちて根之倉

ねの雉子と云かくあたりといへり其鷹ニ
多いと云ふあり鷂と準て此品旬より秘して
鷂をせうといふ鷹也と注之口傳あり 注
書ニあるへし

追 日 はしたか 廿一かり衣 鷂之合物也 尚流之兄鷂と準なり
又小隼ともかけり
定家小鷹十七名目扒 兄隼

日 青さしば 日石 青き翅なるを
西園九十又 青き野のうしろ翅青し
定家小鷹二十五の野お 青葉のことく青毛なり

日 赤はしたか 廿一かり衣扒 赤き少年と云り
西園九十又赤の雉をうしろ翅あかき毛なり
はし鷹の毛羽あるを赤しとみるや鷹の後
からはし 又赤きしはしと云あり尾の
さき毛あかし八符を黒し 剃羽

追 日 すそこはさしは 廿一かり衣 尾の裾濃なるや
はし九三ひとよりも 尚流には雀鷂又雀鷂たかなる 本
一ノ扒同
西園廿六かり萩 小鷹なやしやこそくてかよひ
つらなさるこそのや

日 定家 とがりつる 小鷹の七 細まへて青き尾鷹や扒きこを小山
わかりともいふ鷂の毛をと知とりいろく文也
日 わか鷂をつ 小鷹八 比山本の よのえ鷹扒し 足まで
も毛あり

日 小鷹山つこ 小鷹十三 條ニ鷂也ら 迷あるへし
菜こはなり 宰大扒りひとえり 鷂兒鷂これ雲雀類白は物へ
日七十二番四て扒 鷂たもの
西園七十又ひとりまり川 鷹はなをを毒そこそ好まる
秋つもの枚菜こはなをいふなれハ鷹はまたなき
兄鷂たる本

定家小鷹六 春山に と年ふる鷹を まかせつゝ 老
多川をとめて
近
丹ごゐの
定家
こゐのや 小鷹十六 移り行く秋 夫四小鷹の
日
すゞ鷹 日右
みさごとらし 夫十一まへらし給 一度すゑて 南をさして鶴
丹兒鶴 丹兒鶴 兒鶴
兒鶴わくゐてもと書之
日
志ほ
夫十一まへらし給撚 鶴は南を征以て 紫鷹とも
紫鶴とも書 夫十一ゐらとていふ之
西園九二さの夫らし撚 志ほとして鷹の白鷹
年をへて 鴛鴦に梅さ妙と志ほと
よそ徐く 白と目し 年まさんみに之
西園百七 冬の夜 志ほたち鷹の 毛はく夫まり川
とかり並は雪まで凝りし尾 後京六十 鵜人の
近
野居鷹 八十九夫多紙 野の居すゑねて飛ぶに立ゐひすまと
けふりこそ見ゆる鷹をといふ
定家百九夫撫て 尾をとるしして弓(?)ゆく
こそ捕らへといふ
後京
まれ(?)ま鷹 二十六夫白き鷹
西園
神の贄鷹 三十九 捕らへけと
定家
吉備津宮神は贄鷹 二百九十七 海をねて 諏方は
定家二百七十八 天の志は
日
多ゝきまた源 百六一いかにして 諏方の神の法る
贄鷹とかくいひ物し
なほき鷹は異名之
西園
松風 夫十一夫多して 年は先名也 漢と何と
同九一意也しと
慈鎮
志のふ鷹 八十大陸奥は
定家夫八多屋の国は 陸奥は広布也
夫 移りまたり
拾遺
まへ鷹 又志のふ鷹
まやたち 夫又まや鷹は 早まはかす鶴く

拾遺
はしたかの鷹 夫木九 萬葉候 春命下之しきとより
日
平賀の鷹 夫木十八 雲樵る 出羽の国の名所也
此所に鷹ありて子をそだつる所に鶻来
りて親鷹をとらんとす時に鶻返さ
れて夫木十九 安野物 詞しかは鷹雄を鶻
ゆらして雌雄ともに撃かりとこれらく子を養て
帯り其後鶻又来りて子を守てわが巣川
ゑしてもとの次元来後過担なりきえとう
ゑ飛けし鶻のうへ掛くと寄せてり鶻
のうへをとりし物也
拾遺
佐保鷹 百廿八 安野 さも山の里浦にて語られし
鷹也
三家
佐保姫 三 さくひめは 春の鷹は恋者也
日
聖の年 二百八十一 雲かく 身より日のまさなしの担わり
柳より下は諸鳥をとらぬ怪さ也

三家二十九 切りて始く 相さ臣く流れぬるふ敵
切く過りくおり 椿てして魚なりや
三家
切る谷川 八十三 沙つかて一ちに此前り
日
みとりは鷹 八十八 秋山の 濃州 北山の鷹は也
かもり
近
耳切る記 九九 若鷹は とむるも切りかとりなり
三家二百七十二 みかとれ
三家
耳中はえ鷹 百十八 耳やはく おちとよるれは名を込みて
なかつきあかり鷹の事也
日
かゆ鷹 百十八 そかされ なかり名鷹也
百廿一かけめとし 赤て気をきえほとうけ物とし
皆ふちくくし前せて せこはあしらく
あくよきん事ある次りく 御ぬ物也
日
佐保雄の鷹 二百廿八 景気ある 鷹は空成也
近
はみたか 九十七 とみ鷹の 大鷹は……つれて小鷹の

かれのこくひゝしとなくえうけるひなく
き小首好けあり色紙好むなりうけ
なひとへ手かとらひあり此とらひとハいなす
寛永二百年 後の世は 目あらひの菖の根へさし
よなとく呼しれとのや

日 日
さへ鷽なり 日右 未經く二過ったなり
あさうに 日右 目のひたとく菖の根ふくく
増てくれたなり

近
志川さい 九十七 とら鷽乃 菩提鳥とも書や 地流まこは布
あり分別まへし 寛永小鶯 九 かもむと

摂政
梢とひ 早六 梢とひかさ 鶴は字と書へし 飛去
たくし梢とまく鷽とも云 寛永四年二九 さとの

定家
鶯れは鷽 八条草子 増て 未満中ち乃ふの
年なり

日
海しほ 十九 飛出る眉白や 常は鷽より眉埒く白

こ説に海しろと白の鷽とすハ地流や
海しらてと云また乃ハ眉白や縁なるや
作ら分別まへし

西国
海しろは鷽 三十六 雲深き 眉のいろりて白きや
摂政百十二 秋の泉 常は人のしるるなり

近
雪白 七十に 雲し経え 白鷽や 常の鷽なりとも舌は白き
ちあり鷽は肉や 白鷽は節なりとも
舌は志うしぬき白までハ黒すしきとて
経を口停や 此見鷽ハさえ先て舌白きと
なり是まで分別まへし 北にて鍛ふよる
とらり 浅京七十八 声し鷽は

浅京
摂政
海みし経 七十一 味名よき
志乃鷽一声乃声の 鷽ハ正月十日門出まとして
とも白鷽ハ一日の夜八幡の社ふまいると云
年くと奈らへの御門の作る人らましや

定家十七 日のしらふは 白き鷹ならむ頃よて寸編め
此所外なり

近 志ら符 七十四 雪白ふ 白鷹なれなり 定家百五十四 何やりて
同 浦ら符 同右 為法七十又奉と々
同 浦じろ符 同右
同 背じろ符 同右 定家七十九 常盤なり 黒符しく白斑を以て
同 あかじろ符 同右 皆白鷹なれなり 定家 赤山白符 二十三 雪屋[illegible]
同 赤鷹 七十二 松原ゆく 赤鷹とい符の赤き鷹や 大鷹に
ありなれけのみにいへや 赤符といふ書に
とや黄毛と手てありけと訓む 桃に
赤符よりて右は鷹也 くや大鷹より
赤符黒符のせんはく両様見て用之
他流はよ[illegible]とて[illegible] 口伝有之

近 大黒符 七十二 松原ゆくらけひのまに汁を鷹なりく[illegible] 定家十二 鷹狩 おぎ野[illegible]
同 黒符 [illegible]鷹の黒符に ちくく符とて[illegible]に切尾よけて符を[illegible] 黒きり[illegible]なり
同 黄黒符 同右 鷸[illegible]符や 定家九十九 黒鷹 定家小鷹廿七 秋の[illegible] 雨[illegible]のや よ[illegible]鷹之
同 赤符 同右
同 しが 同右 未詳
同 新符 同右
同 紅葉符 同右 定家小鷹九三 秋の野に
同 黄符 右門物 定家二十二 [illegible]ぬ 一[illegible]に[illegible] 為法[illegible]
拾段 黄白符 百八十一 [illegible] 黄[illegible]の[illegible]鷹や
定家 黄黒符 小鷹一 [illegible]川 [illegible]中に[illegible]切[illegible]符也

雀鷂まなや

曰 地田赤鷂十 野ニ出ル むこなき物や
赤ち鷂 冬三 秋鷹に 鵰して鴨鷂 鷂鷂
鷹鷂は鷹よりちいさし 鷂ゑ似たるに
見へし次第は 以て白も鷂なる

曰 鴨鷂
何しらす 冬九 一ト云 小鷹や 一とせ小鷂
鷂ゝ鳥 冬又 鷹にかく
せう鷂 九冬 其に鳥り
くるて 小鷹冬九 に出する 青紀鷂や
鷂鷹 十八 に出し 二度は鷂の大事や 春もまた
かとあらは 外のつかひ鷹にて 人は好む
なかり鷂きていつも きうと云 鷂鷹や
みそさ鷂 小鷹冬十 口鷂ひき 鷹くろけれ鷂ゝ
嶋の紙ゝ上

近 せみち尾 冬三 鷹によって
曰 志らふ尾の鷹 鷹匠の前をかく
曰 ちさき尾の鷹 右同し
曰 黒尾の鷹 十八 鷹わらふ 黒の尾はしく尾の先に一文
字にして 村中ひくふ見ゆるなり 班毛
黒尾とい へり 前よりそのすくれたと ゆへ
尖ひやうし 見てもこそ

曰 黒尾 古宮嫁や
冬又十に 霞にて くろうす尾のこし沙弥くふ 白すけ
あらし尾 なし しは 大名 小名 へこ
しおくく尾持のまゝ 尾ハ鷂 海
ま下けて かわら調や 鷂鷹より 好鷹
曰 鷂尾 曰右
ハ志 鵰かくして の上の事也 鵰別 鷹
冬又十に 霞にて鷂 鷹ハ尾前もと けれなり
くろうす尾といふを 好むや

辺
尾さけ　辛又ちうし宗や　尾のうへに白き毛のまじるあり
　多かき坂すゝき鷹の楫とつり

同　町かく尾　同右　箭をきりたてたるや

同　尾ろく尾　同右

同　志ろく尾　同右　横に筋有かゝるをきらぬや鷹にあり

同　尾そり　同右　多く白千すちの筋なりや

同　鷲すり　同右
　摂政　上尾　巻十一　惠慶の　定家百首山川有

同　多そけ　同右
　西国十六精ちの母　尾の様や　鈴付の尾は下白し
　定家三百首九　中精文は　上尾の頭にあらん

同　たつく尾　同右
　摂政三十首よし鷹の　定家百首山川有

同　ありしは　同右
　摂政年首よし鷹の　尾の様や　鷹通の下なる

辺
同　大石打　十八　松木も山折　定家百首山川に
小石打　同右
　定家　石打　百首山川有　下は尾といふ　為家八十首　山家の
　後京　後京年七白毛なと
　為家　君志う次　年七白毛なと
　為家　鈴付の尾　年一　為家雅ら
　定家　むやしそれ　年之新道房　尾のさき白きをいふ

同　尾白み　小鷹年こゝろて
同　青き川　て　年も五つ鷹は　青きさつての色は足をとこの毛
　黄をうつてを帰りて　白川毛この面にを

同　このむ

同　皇そてわき毛　同右　様ひのまさしれまき毛なり
同　あひだ　右同打　むちをいふ
同　多ひじ花　同右　中ひのうしふいわのやなるとの〻
　又白いふや　又鬼ひしきともいふ

近

毛すね　脛　九年七より前に出　すねは脛をいふ

定家　かけ爪　小鷹二十五より　定家六十三鳥屋出に　足首さき所をいふ　鳥のかくし爪なり

日　鳥かくし　小鷹二十五よりて　人あしくハ大指や　せ紀爪や折爪とも

日　青さし　百九十羽竜に出　ふ　嘴は根のせ紀爪をいふ

後京　ひろの羽　第二十より出　鷹は羽の名なり

日　さわ家　日右　鷹は羽の名なり

日　うさ　日右　右同じ

日　かさり　日右　右同じ

日　おおひ羽　八十二御鷹狩

定家　あかねさし　小鷹四十　あてかり　上は羽や

日　うまへの毛　三十四よりかさね　気のもろき時立つ毛や

西園　ものひの毛　十五鷹にもなく　慈の毛や鷹は好み時立

近

遠山毛　第九羽鷹に　家よりは嘴の脇に出る羽なり　毛試して年を鷹は毛の所く

後京七　ぬりつかは細いふせん事なとのや

定家七羽目と　東国よりは鷹との初次に鷹

のほ毛とも出迎いふ　又鳥を好むく此毛ともいふ

後京　わくつかハ八十七我意を　赤毛の揃へるといふ

日　かへりの当は毛　第さわ姫の　毛の名や

日　くまえつると　日右　右同じ

日　より毛　第三わし鷹も　うし後の毛や

日　くくわ毛　日右　白乳毛と川ろ落は尾あたりとの尾落毛丸

いふ　但椋の羽まてふつわ毛とも

定家　第四より鷹は　胸と腹と揃ゆへつせつる家

兩やしくつは毛　或く白き毛あらく落毛丸云と　わ毛え鵜の事かへし又定家

の新は上あしく　鎌を揃ふるしせつるとわ毛え　喰といふ

羔ね毛しつてひの風なかへきみやいふ

後京　雲は毛家　第十七葉よりより　おりおりき　まはり毛をいふ

定家　かくし村雲　第六よりたの　綿毛とて鳥の胸に生ずる

後京
みとり毛 第一 みとり毛は

摂政
さゐの毛 二十二 さゐの毛の 虎の上は毛や

近
菜なり毛 九十三 らうれる まの鷹は身の中に 白く見て 横也

梅の紅毛 二 まゝめて 日は前まる毛や

卯る毎の先を以て 近すゝる物なり

風切は毛 定家 叱まり 鷹の 鼻はわきりふまる毛や

定家は鷹 はりし 鳩くゝ 白き毛の

はり毛 九十に はり毛あり 白き 綿毛あり 綿毛をあらて

まし白て 毛のそ毛や 脇を立る時 立る毛や

加らま手り は毛 日右 脾の毛あり 腰しま手り は毛ハ 長うきて

いひつて 人色也

摂政 二百 加らま手りの は毛ある ねまき 通す 程

乃鷹ハ 逸物なり

後京
二紅毛 十三 御湯殿 定家 十六 鷹は 足ふ毛紅毛あ数と以ふ

加らまり は毛の羽 物の虎

摂政
指子り毛 三十二 はり毛の 家をまく 加き毛りと以ふり

夕紅の毛 七十七 はすゑの 勇むる風切のり 黒き見日とゝ

小蓮て 毛や 虎イ はらての 毛のさ毛や

ほり鳥毛まく ハ此毛より 加きらるゝむる

あり又毛 おほきくも 汚るゝ 毛まつる 毛や

浮草の毛 九十三 紀家の

なみてり毛 九十三 なみてさ紀の 名ありさ紀の 腸は毛

よりニツ 同を以る

みのり毛 九十八 みのり毛は たかきゝ は 加てゝる 紙ま

はりる毛 あり

紅の毛 百 くる毛 の は かしらてまる

来の毛 日右 勇たり ふはり

なすの毛 日右

紫乃毛 百十二 むらさきの 虎の上 緑の羽の 物ふまゝ

指子乃毛 十二 山出の 手先風切 見え 同ふはり

拾遺
片毛 三十五 行毛より　帰るは尾也

同
うら毛 同右　鶉の尾羽也

定家
毛をひの毛 二さかりの　くり味かへのつ肩より出る

毛を出すといふ

同
はし萩 二十 まへの　尾毛の端より出て

同
つなぎ毛 四十二 まへひの

同
大月毛 四十八 くまきより

同
庭鈴毛 四十四 たて 同四十八 まへの　みえて離れて毛也

同
ゆるぎ毛 四十七 まへの外　背の外の羽

同
ほろ 八十八 おもの　ちいさき羽二所あり

上毛はなれて飛んで 同百二 上毛なり

同
松原毛 二百十四 雲雀　鶉の後の毛の羽なり

その鷹の毛の端のなり

定家
蓑毛 百五十二 といふそ　尾のさけて尾のさき

あり　西園

同
栗かけ毛 百五十 鷹の　首のまへりの毛の毛也

同
目杓の毛 九十二 志まてか　羽もつ毛をいふ

比翼 ふかの羽 追羽 羽をなかし
きはの羽 九十四 はりけなきて　尾羽より落羽毛なり

同
志ら嶋 三十八 志らきなき　ちりくと鶉の伏羽にて鳴や

同
鶉鳴 同右　わしの伏羽なり

同
鶴鳴 同右　あしさきの毛なり其末をよく摺

同
ふしわく 同右　えたくしひとくり毛もとや

撰
志もつら音 百九十 伶して 九条院 ゆるして
こゑつら音して鳴声にや鶉毛
あしすす又志らく鳴てあしすす声の毛なり
てきれくしらくは時ハ胸氣肉ふとし

梅翁
願ひ出そとらへて百韻九かしよは 鷹狩の花相也
寛文年中の発句也
追
行あひ川 宇九かり衣 わか鷹人は慣れて鷹狩人
よく中ゝよするを以鷹にたとへ云ぬ
珍しき鷹道の末へ出たる弟を讃わるを
人は懸るまいは鷹狩もきてらひそて 鷹狩
のつれなくいふや
淡水
のけ相川 珍されたる 人はのきてまさ花へとん
六狩以下日宇文うんまの鷹狩色 寛政十一日ある八
寛永百五尺わか鷹は 郭丹国中く八頭鎮の
鷹狩以下 日和中く八大川きたるやと云
日
鷹狩相刈 五十一名しくを 無比乳仲や 木のかくうりそ
いるも同
西国
相らき 宇文かる〆次 左の相狩お在狩相刈
〻川筆や

定家
どことよる相 小鷹宇九ある鷹乃 左右へつりに相や
追
初こ相持く 十文字とて 鳥乃まこすむの尾うくく狩一
文字よいり 鷹と次相や 追物の鷹心
ききたき相や
日
鷹梃こんの相 在八追を鷹 職しれとの〻鷹狩あむ
雨つれたまへちりくてよとらりゆうこうく
相をつらひ飛出るを是相や 追物前にてた
はらぬ相や 大鷹小鷹はよる傳しきら但
小鷹を相手く 身かろきゆへこすつるらふ
しかし次とらた秋わきて御小鷹ふも 追物
前にてたつるあく大鷹両傳なり
西国九十九 生し鷹狩 鷹とも云る岩とち頭く
かなしく頭るそくたかるといふ
梅翁百五一冷し美 鷹下より鷹あたり岩く
又ひ一文字ふ 相りく へ頭あるをといふ一判

定家
おとろちきて百年ニちかし鷹は　ねのつひ蓼樋の
あらしふきてたる後いふ
近
みさこ　ね　八十七番　みさこは　雲ふ　ゐえ
ねとつひて川へ出　魚を取
定百六十　ゐの歳　入て　ありて
きさて
鷹も宮にみさこねつひてよる野の
せにくきもく
荘
とろり　十二ひとつ
曰
あさき紀は　ね　辛七番　谷へ入　一文字　ねなり
近
むかし
鷹も甚しく
ゆくしく
後京
まするとも　辛之
西園十二番
谷するとも
荘
八番
あきとい鷹　会よは
ふかく　ゆのきつさ

ゑるの人　何とく
一文字ふ　りとます紀ねにや
後京
きうちふね　辛六尾之
西園
ね秋　十九番ふくし　帰の
摂政
ねへ　十六ね　雌雄ねとくへ　姿
と次
後京七ねとへ　足有　ねとへ
とた次
定家
鷹の　ひ　十一　鷸
是鷹と　返ひ　小男を　鷹
摂政
ねの　ふ　ゐえ　を　鷹ハ　特集　二番
ふ　と　ねの　蘂は　十二段
ありとめ　ね　ひ　へ
て　鶉　し　すとり　次
曰
ひとかし　馬ね　七十一　村の　この　ねて山

涼しくつかふ相や此相をつらぬく芸目将さ
出るや

近　定家
大輔とは　百五十二首とは
肩組わつ　半丈あやさの　名をも伝へ遠方の紙に入
名組んでちりくとくと肩を割
年さ涼ら

日
あ紙り　日君
寿相を知るきりく　知りくとあそ川
年前りいつまで九年に涼の細也　大鷹
こ肩とふると云あ紙の細也

日
着物記　日新
名は龍虫くすら紙の河の名子も
いか細や

日　西国
名のそれ物記九十二あく　鷹の八十七　大盤く
鷹此大金新く
鷹紙名紙の龍虫の紙は名のそれもとも龍虫とも人に経細や

日
些それ物り　日君
田物なせ合やんとくあろく猶くあろく
鷹とりを取りつり龍虫をという鴨鳥鶴

鸛よりの次遠きなり嫌年也田物に仕入
名のり鷹涼よき前細る物に不思用なる
鷹するときて来つ大細の遠きなり大鷹小鷹なと云
ぬゆくまるる之拵くとみる時かまて云すき附

近
ん遠る　五十二あり鷹紙新　名をと見て目を付て満ちるを云

日
兄こふるる　日君
鷹くいふそ目細き猶さ次加ひ入て鷹
名をと取りかる年や
の体や

日
小くひはく　半丈あやさの　うちかつさく名紙の年之年
手紙記

西国
いろとく兄ろ　八十日あ父ひの　涼りひ入る鷹い布約
のせ物りて行声を聞ゐて名此あそを

日
保奥海き次　五十七のそゑて
此ぞ　名此気くと鷹此くそくとふ
色ゆていろとく此そ我孫るや
十六番の紅紙　あり　本細なるとらすすなり

近 旧
本歌 十六 秀句しらと 八十七 ひく 名所 本しけき
枡をいふ
悔もらう多くしといひても程ちかきといふ事
名所ん野らしれをいふ
本の歌の詞や本歌をとるといふ
本歌をとるといふ
旅ろつきて物わり此本歌をとりかへし
枡をえらいひ舟くわり歌くつき此名と
仙洞の御事也本歌を取る名所事
中く三代の廷由をかへしかしこ被也四季
他流には本歌といふ南流には不用 後九十八 我有りそ
旧
本歌よる皇出くかゝむ 十六 名所 此枡 本此めつりへ名はしりて
ぬけくいひと歌人ゆく本歌より立出
く筆の役ちかつて本歌出
此枡にらいわる是本歌をといふ
とりく名所にかく厳なり

近
後京 本歌より 十二 枡くし候 本歌といひて用
摂政 歌の詞 三 名所 本歌と西の名の詞をえらんて
中此 名所 本すへ被たる所此
本歌と海士の曲 四十二 此枡を取かへて をけるも わつらひ
と本歌は海士の人の詞や思ふ
名所 類をとて古くなまは其切捨て
旧
いつりかへる毛く
よそ本歌をとる 本文 移りて 枡 本歌との但し枝有り 歌を
とて本歌とるとはいふも是なり
旧
因をつくり 八 旅のまし 覚え名とえんするといふ
旧
名頭をえ奉 十七 名所 名所見奉なり
旧
見名 三十九 見るする人をえてもも歌にえるそのえなく
えらくたわらといふ
西国 五十七 のちかへて 歌の返は本の枡と歌の名所
本より本なり 上様 四十七 名所
摂政
人あらひ 本九十九てれ
歌は跡くの文人の中つら名所
ゆらうもいえとなの詞をえ
まえへ定歌をえしたり提
あるの名とを歌に絵をえる
歌に詠みて也 至すもよろし
身の本よも見えり

近
入事 十二才[illegible]　[illegible]

口
[illegible]

口
[illegible]

宗家
入事 [illegible]

口
[illegible]

口
[illegible]

口
[illegible]

近初
入あ[illegible] 二十 入あひて [illegible]

口
[illegible]

口
あて[illegible]次[illegible] 人[illegible]詞や 集[illegible]

口
[illegible]

口
[illegible]

後京
[illegible]

追加
志きしまの道　字文特つて　あしくも紙志きしまの家

わかの浦　くみ　ことはのしけきを　わかの浦　とも
　　　　　いへり
　　　　　古今八十九　わかの浦　ことのは

うきぬなは　本二　しけみの　わかの浦の　ことの葉も

きのふのことはにつきて　　わかの浦のなみ

とりしく　本八　あひたち　木の本のよる　あり

よひのかみ　宇　あひけに　持人ありて

らんまん　古き物しり　鹿しきの

追加
むらかけ　本古　文の　わかの浦の　まんことも

とはいへり

遠江海　八十之河　遠江あはうみ　遠江あはうみといへり　大海

小海は　遠江うみ　小海の小海の　遠江のうみ

海には大海と　近江あり　湖を

てもあり　かの湖　遠江あり　大海

近江と遠江　遠江の　遠江の　又

小海は遠江　遠江は　遠江海をいふ

いへるは　大海に　遠江海あり

ましくは　遠江　さくのけれ

又　遠江にても　かくの事は　有る

海しきところ
後京極摂政　ゆくへもしらぬ年や
後京　遠ざかり　二条の院　まよひしや
近習　かたく　九十　たけきこゝろ　かなしくのこをなつれ　あかり
組しみひく　旅のところ
同　無知らず　八十七　雨の　賤をとめし身々　組ましまや
定家　ともり　百年ニ　なれは鷹の　鳥取をかたちをとなく
近かく　鷹は　菜園をとらちめく
とおもくりてのかへ論のさとり
同　ことなる　九十七　なる鷹の　鳥とりまくに近習なれ　なり　なれは鷹や　鳥の弐十六ありす
西園　初鷹を好む　八十八より出て　鷹のかみも　世を挙く
河きハ　波を戸や
同　とゝくところ　同右　まかに河の鳥の　従をかは鷹のえ
をとゝいて　放すともや
同　鳥の飛つむ　百年ニとまるまでに　鳥とともく　近をとに
近習　めんゐろき　十日村家　おめん鳥を　合て近ひらかるり
めん鳥と云ハ　雄をと近ずして　後の鳥の近さ
をしかり　鷹おもひつきし年や　似一夜前ハ
鳥の尚しけるもいつゝきらら二歳と　雌ハ死
めん鳥の　つきなりし　日本七　まで　雌をば
はやまり　鷹のくすえ気なくこれの　ならへ
まめん鳥を　されは　いゝかとともことさ　雄を
ゑのかふりよするといひつゝ　きより
後京十八　名鷹き　其れ　甲賀なるを　鷹雌をはす
なり
西園　早く　これもすれは　雛の雌　其八子をと鳥羽の
さふなりたるすくとつゝかや　又其を雌
味のなりまでや　めん鳥の　流くや　まの鷹宮
鷹を雌に流つく　海をしつつりすか鷹近の
沙ふ年なり
宗祇十又其の野に　大鷹ハ雄をと好むとのや

秋問夕まくれ雌を雄とのや此をとへは
わんさうと遊ぬるのや
近初
かゝ義 年八ちし鷹此 えらふる紙敵中者へわる我のや
は 多くすゝけ 年文字あるは 多似そうむそく遊なりと河
まと出くゝとかれ手にして当然遊の家
さくふ思見無と年や
定家
すゝけ 言八文字ありて 此外かるすゝけとそ 鳥人遊く為くもかそ
さそ新そとこふ
は 心まねう花 右日新 書あちられは志らもみはくなり山城
こすうふ流きか〇て山まお者かくとや
は とかくとな家 年九文字中は 鷹为れ次第をえて行そう
無無てと年
むろくするけ多くもうまき元わくとす
雄のとく招く海とつきそ行年や
は かおほくてくれ 日右 かすをとうきいさてらるおあう路や

なみ頼
為経
定家
空まく毛苑をちらし六十比まで
かゞそり初なし 年文あり鷹此 ちゝりかくうそ無
むとすまてとかなたくして毛苑をちる
すゝとこふ
近初
志摩と志らぬ 九十六狂字ん 鷹志摩もと元みくとて
志摩をば晴て紙面しくう鷹むかうしき
年まらくり形鷹は志らむ年らん
又八飛鷹は年まそて出ゝ自然鷹然家
此秘あるこくり
口 なすは海鷹 口右 むきとつらひ志原をぬかしいろう
その成志うくるとこぬとふう
志かくし義そうみる鷹かとまいるまし
きこと切者とあきん
口 とり志らむ 右日新 きくこそ元ぬうのや来国はきれ鷹

鶴とい ふや

宝永
鶴志らむ 百二十九鶴いのりし さいく合すまえゝえ
原くして やゝ好みといふ鶴好せう出
味や

日
志らす 百年 関ヶらて 志らぬれそ多くとせ
らくとちう御とらふ

迦羽
かさいり 九十六 祈られそ 志らくつらひ夕放鶴好んし

西国
多りる哉 二十八年のそや 鶴多くは見えひ路り
とゝ為波ミ力ひ方多つ好み也とまく出そて
たりうきしと云

宝永
こ好なる 九十ニ好けすら 夢の中とはらんく
里志らん ゝさ千すら居ゝとはり合と云

日
かなたちて 九十かけそのし 然そこ好ひ赤ら年や

洛東
好くめる 六十九歳の 寒夜の鶴多く衣そて
足をあくしめて 夜の行き更たまを待

寛て雅ち
安政十二鶴好まん 鶴と年月ては多くとられて
雅と年し して りの字をわすれて天の好き
たら雅ち千り三百まで ゆうさ数え是を
はや 祈の情とふ

日
祈つる好枝十三まえて 毛此御そねくしと定め
節りの雅のり か好ちとのや

慈法
跡ん 土いつそやい

日
元至鶴 七十に元至鶴此

宝永
ことらけ小鶴廿七とりかへそ

日
巣ふし 二十五子にわまて

日
すて兄 日君

日
丙よる 年久巣おつし此 親鶴とやの内へ石紙
つくかくさし すらや 而ととら千ん数まち

奥羽
好出そむ 二十八りけれる 人のいつゝ奴まれさ 盥そむ

といふ歌によりて鷹の切羽けん詞とまの
根岸根岸根分にさしあてて詞の名目
中にも此をしや正記を鷹詞と云
て鷹詞に入たる也

拾玉
鷹見る 二百七 帰りて 山を越て鳴らん

鷹狩人 二百八 きたるや 山をいで出ける

後京
山ゐの続 二百五十 あくまで 山より出て見ても立

さらす 文七月なるまくは鷹飼あし
かへらず帰るのや 白きけふは鷹は
親をもとめや
新院
錦わひつるの素主一面
詞ありてある関や無別は鏑あす
志や

日吉
御狩のまつる事や下もさらのや
鷹そさのみやまうつる事多し

迎鶴
かりがね志く

口
たかがね志く

迎鶴
鷹志きて冬の減 二十四 先達も名は少なりしたる事 なかる世あるを
いつ事なり 鷹のとはいつ事よ記を
紀海しるといひても世はしぬ翔
時なし拾遺 ひ事鷹とはいつ手すひ
けるる鷹といひつや 鷹の鷹よい詞事
つまりたる鷹のけや ひけつまりまた鷹
とらえ 此を放鷹鷹よい常にも御狩
わたりたり

皇后
関ひそ 百六 志ても此式 鷹の鷹や

後京
関とさる二年七月とさらて 鷹狩ひ出しるるや

西国
狩くみ鷹 十九 常ふくと 鷹痛ひ行きは

狩をしいつ事を狩つ事や 慈恵 第十八す名鷹の

皇后家
暴狩 二百四 年区 暴ひ 狩鷹や

暴気 二百五十五文されけるを 鷹の雨部として狩けれ

暴つまりさくも事を出とといふ文

野鶉谷川[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

近詞
鶉の[illegible]七十[illegible]

口
あ[illegible]

口
こ[illegible]

口
あ[illegible]

[illegible]

[illegible] 十二[illegible]

鳥

近用

日本逸史云天長七年十月丁卯天皇幸北野率猟鶉雉掛水鳥便幸嵯峨院賜五位已上衣被 国史三十二 帝王六

日本逸史云 天長八年二月丁[illegible] 皇帝幸水成野 中時獵雨 俄頃而晴 多獲鶉鶉[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

野鷺谷川[illegible]
なり
定家 いさゝか 二百六十七 [illegible] 胴氣ありて いさゝか[illegible]
[illegible]や
[illegible]氣 二百八十九 [illegible]
事や 鳥[illegible]
近詞 鷺の[illegible] 七十 [illegible]も [illegible]
口 [illegible]の[illegible]はいたらん
[illegible] 早六 [illegible] 年や 二川 鷺[illegible]
[illegible]事や
口 こ[illegible] 早七 [illegible] 一川 [illegible]
口 あ[illegible] 早八 [illegible]
[illegible] 年一 [illegible] 川 [illegible] 鷺 [illegible] や
早入 [illegible]
[illegible] 十二 [illegible]

鳥

近詞 [illegible] 年三 [illegible]野 雉子は 鷺詞 雉子はいた[illegible]
[illegible] 押[illegible] 雉の
事や
口 [illegible] 口右 [illegible]
雉の事や 口 [illegible]
[illegible]川 [illegible]の八 [illegible]
なり
雉子[illegible]別足[illegible]事 十二 [illegible] 禁野の雉[illegible]
[illegible] 鷹[illegible] 南[illegible]
足[illegible] 雉の足[illegible]別足[illegible]
[illegible]同[illegible]足[illegible]
別足[illegible] 高[illegible] 彼緒
[illegible] 畏 禁
野の雉の事 押[illegible] 菁
紅徳天皇御悩のみぎり 桐者の曰 彼雉

の宗かりと云て深草郷と以て人云ふ
こし海りて鷹に捕て日本へ渡り
此雛をあたへけるに彼此鳥三度是れ別足
捕て鷹は鶏と云鷹足云り有る其
　指も其の雛をとれりとあるとかいへり
鷹なり鳥といひけり口伝あり

近詞
婿が君　本八鳥ては鳥なり　初の入ゆる鳥なりといふ
旦暮
古き渡　宗九　其鄉に　甚せぬかたに祐すなといふ

口
閨すゝむ　九　鶏なり
口
草ぶし　御とも十　さへ鷺の　つきてある鳥の声りがみ
䘏

西園
竹にも鳥七　五言絵　大かたの鶴の鋼をいはゝ　吟鳥や
学ぶ鳥あり
文様を　ともにして　草の泥まく　筆
も古経なるべし

草渡　五十之巻の節に　其の本つるとまる草をとほ

近詞
木鳥　八十鳥そは鳥　古き雛と以て　口伝八ありけれ　鷹は
みゆきかへて云鶏の絵にて
いくをされる鴨人も声しけ見返す
よるを鳴せんとする　赤上るや

西園
古巣　二　初めて此陵　鳥にも以て　口伝十七　鷹の
知るかはしき声にとまるや

口
むこどり　宗上延神も此　鶏ん鳥になり延宿をとつきの
鳥たちとて別の雄となりとなる

口
よめどり　口伝　めん鳥あり
宗家二百九十ある絵　初経はとん鳥此はなとまる
アとめ鳥比と云とかく

口
ねとる鳥　八　鶏なさし人の声してねかしに相音もせすに
の井を思へと云くかくるや
西園六十八　鳥いちや　声つかふかくまして云とかく
口九十八　巻りん鳥
人子も鷹にもかくまて添よ

こゝろつなり
拾遺百首 八句の わすれぬ人は なり
新古川 [illegible] 人はしらで [illegible]
定家百首十六 [illegible] 人はしらで [illegible]

追 きえはてゝ
なれはてす 末 [illegible] [illegible] [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible]
つねなき [illegible] [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible]

门 かくなる 辛一 [illegible] 日本 [illegible] [illegible]

日 わするな [illegible] [illegible]

定家 草の [illegible] 八十三 [illegible] [illegible]
[illegible] つき [illegible] [illegible]
[illegible] つきを [illegible] [illegible] 前
[illegible] 水 [illegible] [illegible]
[illegible] [illegible]
西園寺一の [illegible] [illegible] [illegible]
と [illegible] 十 [illegible] なり

迫 くちなしの 十三 [illegible]
定家 二百八十六 くちなしの [illegible] [illegible]
かね [illegible] [illegible] [illegible]

日 つきせぬ 辛 よひのはに
定家 二百九 [illegible] [illegible]

日 ことのは 二十四 [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible]

定家 二百九 [illegible] [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible]

西翁
落つる年之頭ハ其始　名残のうちて草の庵
ちらちらすして黄昏の姥かや
定家
兼載
名付落葉　二千四百九十首此
引こ干すり　四千九百五十首
定家百首もらの花紙　しきこんなきり出引
と斗とらす
迫
いまうら　年之名ちりは　行きるや
定家
遠稍引　百五十一首成つき
西翁二秋の月四十　志ちく進落されく殊更
や出一夜追落すともして
兼載四千九百五十
日
立さんさうち七毛落葉や　遠さんのまきれ下さん
西翁
生えぬ所七千七百五十首り　草ふ落て　あ紙をまつ
とし　遠くあって　とと細き毎りと
よや

迫
つけ竹九十五人名手
西翁
はちく海く九十尾のもうた　らく雪此般ありとして
雪本入とうしんと手すり附法多語紙
して立筆やちまんと為とらす　本字も
又ま物所号語るく明附の声や
定家
ちまんうた本紙と年く　つ五筆を削く
海ろ所百五十之第ゐて　雪人海しんと立子て
名の所をとりて鮮の霜所とて立
日
称とり二百八筆ありの　と海り所此句ち松松
のうこ紙法く年　ふあひく　雑念うくまく志いく
と所角也　つ多所をは内うに
兼載
細の所つよ花紙の
定家
おつて本き紙　次十六　声々ゐて
日
わうと雲花　年よ称りひうり　毛細すり　雲み此々筆人宿
古用此肉のり七月並此為紙　家本ちから
あく雲花毛とかつのらくして　後て

雁をおとすなりや しんどう雲花毛を落く
落は落すなれとしんどう雲花とらふ
しんどう雲花が迷ふれ 打ちとる鶴 鴫鶴く
としなりや

後京九二 表紙き 萩比木つさはなりや
旧 辛七 萬てり 秋月は雁羽胸ることく
於次辛二 秋の呼名 出とく見毛を落すと云

玄性
雲花 空を雲を入 辛一 枝とりの

迎
かし雲花 なまきす雁ひあり 雁羽そのひ四季よ加減

旧
秋の末ころ 在日形 七月末あり 八月へかかる毛御寸
数は落をとふ 秋のかかると云

西国
しく 二十八 鎮西し

旧
小あらき 名 しく此あく 下く 世はくあら流
そうや 玄性 辛六 小雲 集し

かし頼白 辛文 秋の呼名り 抄 雁羽をのしるる毛をかへぬを云
別の小名よのしと云 字かもへ高中章略く
但 又かし志てしは 中さ子す但 毛の利しる
と赤 志てしは 歌 常ふ ほし 後と赤
志てし中人を田舎ふは いふなりといふ
西国よ中とかく 四のしあり

定家
ちい鷺川き 小鷺字一 小名と云 河原雲花と云
鶴よ つきて なかり たかまりや

旧
同ほき鶴 八十一 あし たるの 鶴の命よる 床をえ打る路を
いふ

後京
ちと経鶴 辛一 弱るへて
於次百八 雁むしの抄 二川 立をいふ
定家 小鷺本六 一 よりと

旧
かし鶴 五十二 秋乃草

摂政百八 鶉なしの竹　きり立といふ
定家小鷹又 秋秋野の　ゐまするは 鶉立所
同小鷹 二十六 たいまれ
鶉立ちて鶉立つなりや

摂政
ころもてに 百八 鶉なしの　鶉毛を落して枝
生洞なす 尾羽ならしくなるといふ

慈鎮
妻鶉 六十一 鷹場なり　地を伏て行を云

定家
西園 うらむ鶉 小鷹 四十二 家まやく　稲刈て刈株
かり株の鶉 七十 ゐとよりも　たちに鶉多く集りてなむと云
大鷹には鳴る鶉なし 秋更けて
枯野の鶉なりや
定家九十六 秋ちりく　かりかみの付鶉の

西園
小鷹狩よ落しいふ 七十一 その上は 鶉なし
まや

定家
たけ深き 九十七 秋の野飛　飛も大鷹は嘴に捕へし
摂政
鷹の鈴をと 九十六 鷹のといふ　よ鶉んとする
定家
鳶すり立ち 五十七 あ声たて　鷹の来てすりたちなり

慈鎮
村雀鷹のと鈴を 七十七 行飛来くや　鷹の行く　鳥の鈴の家 六十八 そよりし折
鷹の鈴よとい子　又さらねも鈴をとい
いるは　の飛羽と行きたねつるはのね
なり椅子鳥の鈴かいたく　のきたる
なり紐のかみと云　鷹は飛きたるそ
枝にとまりもとるなるべし

近衛
鷹をこそ

定家
めかれ　ぬむ 九 春の野の　鷹たとし鈴て飛て印
と落てて鶉めかれぬむ付は鷹は飛かなよ
たまたむ けのなき草の中にあり

秋く狩場に春のみん方を今なりとも
事有まはさ女〜のうせり

（追加）大むき　早もちまさて望　鷹の網にも大鮮とかくなりや
多くつまろく杉りと拾る術也

類聚鷹歌抄　下

（近六十三 立てり抄）鷹匠　鷹遣　鷹師　鷹養　牽犬飼

（近）鷹請取渡之事　鞭（八十一ひく多此抄）貧鷹　兄弟によりて
足革ハより此鷹　又ハ経緒よりも鷹
を取縄同前なり　始也鷹　氣鷹　貴人の草
下緒其外有之　又哀鴻之鷹を取手習ひ
となん（器）此鷹ハ眼鷹と名をとり　器眼
鷹乃足革大緒色白し　但足革ハ左纏
なりとも大緒を紙捻ゑまく可也

（日）鞭の持様の事
（日右）鷹遣總の如く持付他流よりて
たてくりて候阿くよりとあり其の
うちと先人なす事當流にハ不用　鞭者
多くたてくりて候則さ此人なし　持也

（拵紋）鷹網の絵（百八十二 大鷹の）車ことて持物制法の時ハ

[illegible]

[illegible]かくのごとく成べし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の事 八十[illegible]

[illegible]五位の人[illegible]

一[illegible]一連[illegible]

[illegible]

の事也一[illegible]

近

人ゝ[illegible]の事 三十二[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

按政年中或の看とらへしおきて鷹と居そ
何まり附たる餌をくひ来まり其附の
とまりに栖のかたとまたけり此枝とわ集く
鷹此上にかよひ雨と雪とに鷹を守りて
此園之何ほ御名鷹の巣あり上りん
巣とやい雛をゆてかへしたり安
みくもりき赤白之鷹此巣ありけり
雨ふりいてもたるかぬへきよりて先代の
例に清め物柳と杉と栗の上にかけし
て西御所へ上りて杉柳より鷹飛
始りきや　按此文行字多えきる歟

善法
注京
巣ゆ此鷹又持たるもし
名鷹あとまさき年之ぶとき白き　名ハ巣の下に
出ると返　鶴鷹此書り

近
鷹の多居へ入る年　八十五　鶴とされ折

此月八日に鷹を多居へ入七月十九日雲霊の
着を雄たてしらへ其次名鷹合出す
とほ之雨雪ふるや鷹とよ早く毛飛
物として出るりき迷て屋根揃ひ出るまと
名定の如く出生の十九日には定居へ
さらりや
注京此とき云し　此月毎に多居へ入七月十
参りしなに打ちる着を七張雄出して
其夫の新にて多居より出るとなり
西園寺二年こそや　巣多居に入る年
卯月八日に入て七月九日に雲霊此着
をとまいまるふして籠出るとなり
宝永二年之巣の事
日早上多の人ふる　八日巣御此日
善法
きりれ出ての寺年二鷹とひの

近類
志鋼

九十九 能者より歌人入るゝと思ふ所よりより鋼
にも雌なれバにもとに手細いさうちに
されども是をるに音ハ貴く母も雄よりより鋼
半とは月やや 志鋼ともすり人の御尊
事や是すれ次鋼は中に立ち 去り
鳥居前ミより 志鋼なり歌人ハ申されぬ
御よりく覚えたり 御いかゞ 指ものを
依て継してにや 見付けるを捨り
といひけるや 又志鋼に雌と鋼去
詠も先雌ハ去表味すると云り 雄去
菱味ならぬより 雄のわし 去
白くとかへの去鋼を去手 有鋼より
志も見てとて 極実より 雌より世
雌雄の両味志鋼と云手細も見て
とや 又雄ハ陽や 雌ハ陰

是陰ことさへ陽より とりりんよの旅までなれ
て前ご御存じ人へ今日の宝中の思ひと見
うや 年来と見や 語られ御神へ御随
去ことを傳へ歌人とすらくに旅よ
鋼と前着子秋日宿にて旅中年見前
此旅傳や 志鋼た雌雄人へ言ふ御て
しくに鋼と云語もにや 両付の見雄
に貴女も云鋼のと我歌に次の旅とき
拝まりて継ぎの雌とも去味よ実なるへ有り
雌雄合わし去に勝負文雌去相鋼に云
少ちまに前も旅中にまたに是に
とりもす引く御ににて去ひ雌の鋼
まるんの旅を渡して鋼人へしとや 又雄
ハは鋼なり先事御通り 鋼魚ときよう
指川十郎たつ傳ふ

慈鎮九十之内より又
定家卿十首之内にハ
今ハ鷹も入りぬる　雪とハかけともその時まても無
鷹かへりまて
拾遺
鷹の鷹鈴鍋の事　第十六鷹のことは　鷹の鷹を
編としての人あまたく毛を落すへし　是肉
とのを次してな毛羽としてのくらくらくは
と名鷹ハ肉のかは空鏡のうちして鍋へし
拾遺百くれ申也　紅の毛　末の毛大形の毛
是しと落してちく落して　鋪の中鳴の風
ぬく　同九十九第二十の　同九十大かとあり
定家
拾遺
鷹の鍋　第十八の鷹比
落しかりの毛時の時の事　第十七と鷹の比　鷹の
鷹み君すると羽く　鍋ほかまり能
先も毛なるかりて鍋を鍋て可鍋也

同年八と十の鷹の　尾の羽さ鷹羽ある物也
羽根の羽さと心尾の落さ羽と知へし
同九十の尾の羽のあしらえ　尾の羽え落しか
ねまえを折しく落して松からす法の時は鷹を
いさ折して鷹の入鍋てよし
拾遺
ぬくめ（第十六と鷹の羽　小鷹比ときの鷹の事
なり鷹の尾ある比よとも鷹を落させよ
無て小鷹比ときの鷹をとるへし
慈鎮
定家
ほかし
ときみ雀　同十八九の鷹比　鷹のみ比かハ鍋にはさ
ほかし鶉　第十之羽の
ほかし雀をかりして飛ふかとほして鍋へ
遠国より鷹をとのかすかに申翔すもの也
同
さし鶉　西四十二すりかし狩鶉をとらり付て鍋へ
拾遺
鷹の鷹比鶉の事　八十大鷹の鷹比　鷹の風ふり
鍋出されて鷹は尾羽をくしくして
早鷹かの比鷹の羽には大物よ叶ハすと又

とゝの内にて飢て流賃今わさ
らしき人ちかりはへるも大猫ハ
これらにて流ハころ歯一本ぬけさかり
なりはてゝ大舟の繋纜なりてとゝ給
はうしや

指段
ほう庵毛もまちかりけるよし　作毛またハ洞意ん
しけれハかの金もち虎や大猫のこ
てゝ所にて高く気をとられて平地をはしり
大猫もよく遁れてゆく也　庵此狸とよて
言ひかりと会人し小猫ほと会せにての
第二ハ鷹を悲しみよ兄日和とこん
会はれてん恭平り

口
雪庵鷹か人見酒筆　九十歳とぞ云すり　雪庵鷹此
乞ふそのわら鷹に如くたん細く
志あり以とかへて其習りしと納屋し

後家
茶引也　九十五ちし鷹此　鷹之猫とよく玉は人
との雪かや

指段
鷹之猫　二百九文歳すつは

定家
足草之鷹之　三千之栗相わし此

口
すへりも　百四十ちのれ志猫しに多情のぬき云

口
鷹か相の麩　百九十ちし鷹代　鷹の眼らは鞍の新と
又ちし

口
鷹をとえ　六千之　栗相わし此

口
わら鷹を関義ゆへ遊泳く　百二何し鷹此　河の義
所よりわけれしとそへく猫をその眼を
こ川

口
わら鷹むかりね　百六十日　わら鷹と　とりわひうので
之語りて猫所のわけす其情く庵丸す下り

指段
分まかりの此鷹　七十八ヵりり此　わらく親くへん多く
鷹に如筆たまりとそのかの其解をとかくぬす

なり

芝家
鳥屋くゞりけ　年一菱ふの　又の鷹は鳥屋くゞりけ

なるほど引かるゝ世にくゝ人もあらし

句
蒲風渋く家百あるゝ鷹は

鳥屋数　年中して流るゝ鷹　年十一鷹の数と　年々毛をとられぬ

鷹なるべし　古き鳥屋なり

浅原
西鳥屋　年八　西鳥屋と　山鷹の間に好物來物なれ

西とやよりて月気早くと見ゆる年中毛

なり物して旅籠に蟷螂の事　ありきや鳥屋

此汐流れて葉に浪さとのし

蓋結
鳥屋かゝる人

楊政
霧にや　同年九　秋ぬけて　霧にやまて八旅に鯖く

なくやし

浅原
氣にも人　年七　秋旅の紋　秋の來に小鷹とも見ゆく

楊政
鳥屋氣　八十一　旅人の　鳥屋に鷹出て後悪

くる人の気をつくる鷹も鳥屋とは人也

常にて見る中にかくる居し　同八十二　こゑをとりて

人も剔尋ねて垣根越しくちるや　同十　垣越を

風なりをとりて毛を旅さきすありき流毛を

旅すなり風として旅人我のみやる

鳥屋しまかまくへし

楊政
鳥屋毛をむしる事　年文よむ時　鳥屋出でとは

日ならえて好へし毛頭くれのゝく也

如く変わりも何を風に出して八悪し

しや

追
出でたてゐ　大に御々に掛　出て紙居にあれ流れまさ

訓出かゝる鷹も旅ゝするものゝ肉かくして

まかる鷹流をば鷹の事な　又くもうて

肉の事も毛を静かなる見所ありと云なるや

ちくら鯖　年文ちくらなる　住む鷹の頭くわかる肉あるなり

春より紀関かく　紙目つゝき勢らかて
以紙添く　鋪絹や　山々つゝ[illegible]
とんて力鋪実て用ふ　ぬ[illegible]
人[illegible]
[illegible]　置鋪とい　雑の[illegible]

置鋪　年二忌[illegible]
[illegible]
けもて　鶯　小鶴　鳥　旅[illegible]
かし次置鋪とはさすとて　[illegible]
[illegible]　倖の遊[illegible]
あまえ置鋪を帯ふとて[illegible]や
[illegible]
[illegible]

小口鋪　口石
[illegible]
[illegible]
[illegible]
小口[illegible]

包鋪　二百八十三[illegible]　雀の[illegible]
[illegible]は早く[illegible]
[illegible]
置鋪[illegible]
[illegible]置鋪[illegible]
[illegible]　雀と[illegible]
[illegible]
二川[illegible]
[illegible]
[illegible]川[illegible]
古鋪　百あし[illegible]　洗鋪の[illegible]や
古鋪を[illegible]絹[illegible]
鋪を[illegible]
[illegible]
絹[illegible]自[illegible]
あひ[illegible]

拾段
鳥此まゑ餌事 九十五 つかふ事は 餌をは紅付
ち餌をかり かへく 鳥鷹 肉も早け候へく
そのかたもそへさせや まつえをよそてさせ候
餌あらく 鷹にかけさせる 菓や
新のうく鶏を以て 餌のやうに
但其日此肉をあたえて かへし かりの肉
ところく 餌に此ふたつ 又別に なけてせよ

遊羽ハ二十八卦
十七日夜 此ハ下
夜なふ子 九十六 ことに切新
[illegible]

肉わるをひて 鷹此まうてゝ 人よりつかひ
多くをかりかうて 餌ぬるの也

鬼にくし 九十七 かりけをつくし 新あるをさへ小力すゝめ
鳥此花の鶏をけつし切く 臆を出鷹
子ゝ子なかり 鬼にくく海をも以て

西
えた腐 早え三るを 小鳥に 拍餌あい 吉み此鶏
をカあるくさして 鶏をとく 雌なふ此鶏
相あくれ 其 餘なりして 鞍 すて 嘴すきる

遊
まゆたし 九十四 此ともなり いちまうと 鷹をよく 雛付
ちは付や 鬼嘴をる 子細に 菓穀 婚かハ
あるとおりと 事志し ぬかりも 鳥子そても
鷹かても 異比究 紙様と 通し 品
あかぬ事ふかして 下嘴あく 志して 切
てとゝなれ 嘴のきなれと 鬼く 切て 鷹
よ縁つくす 又つらぬ事して 拾て 鷹くなり
とゝしすうや 但様に 手多し 鷹ら
とれ羽に 様く 鳥 又い 鷹あらに 吹出
つうれぬそ 去する 物あるを 縫く 鳥いるを
すかれぬ事くよこしらへ 爪もさろつまそ
さ爪をかて 鷹にとらせ 其を合せても 爪の
ゝしぬ 縫て 拾ら事 拾無や 鷹を
つらぬ 様よ 嘴のさ爪を 切大根 せても
其ありても 甘く 鬼して 早めて 治む

鷹は山の名にして寛延す事し
鷹になやまりなくは名に山鷹此事し
鷹は五位若鷹に侍らすなる此等代若鷹
並は　大鷹　若鷹　山鷹は同前　梅は
兄鷹より鷹しらも　比田家として鷹
此元禄十七　年四月中に
比氣をとらへ此東にて海らさとらへ
年々中ニ前の此事なり此年にもりて也
とて　網本にてとや　それにとも　桜に
鷹にあるとこれの事也や　青鷹此ことに
人々の勝ハ一段鷹の雲や　赤鷹は乃
鷹此事や　若網をらす　ちに網付も
雀一川にかりとて又ハあらハ此せさて
海てうち見かたく　し　鷹若鷹にて此の

色
大鷹の春若大鷹網事　九十六頃まえ　青鷹此くに

近
肉のこと此事　四十一月より　田舎肉結ひ定り
それは鷹若鷹にして赤らみにもなく
人々をも強く網たらし　若鷹を捨て
打ひ出し網鷹もらうさまとこそ
鷹存知侍りし赤く此事うちれもりそ
雲雀にうまれく赤鶴なや　若鷹て
赤らもも　網本の鶴や　鷹此家に御座す
出之り
桜く何をても中きくて此赤あり
之りて数ハ鶴なり肉のくらさ鷹
桜く侍れは少赤鶴くなり肉比也此
れえ鶴ハ赤若をうす本有時網強の
て物程なりすむらしせらひて鷹此
名人比鷹網とるらぬなり鶴の有大
若鷹く鶴く肉く肉山にて鷹本ならく

もちとは年 胡仍をいはふ生姜の物
をもして用ひ 四日に餅飼 廿七日
の餅かつら肉 順逆の餅飼 中餅飼
つめ餅 ふくし餅 薬餅 灸所 諸
病の療治をつかさどり

定 かつらゐて 百廿一浦語に 急のびわるによ 付ける肉をあふる餅をや

〇しさらへ

近 かはほして 四十八巻 初日の抄 飼物て肉く

同 肉のつめいとしき 同右 多飼すつき事くし

拾遺 かぬしてつまる 二十九 うれしての九條院とかくる
住吉に在位しおかしま夢の告ありて
下向し帰井に御拝殿所り時に鶴
飼に御行しま甚さしくなまたのへあ
鶴が肉をさき取り出白中ふらく出来り
といひけり其住吉北御託宣のすき紀湯の
事なし

定家 しむら家百首よみしに しつまきらるゝ
同 しつらすきうき三百首よりとらぬ
定家卒 吹て見れ 吹て見く肉うる逢へ
さしとけふる細縮をみさいく

近 唐瘡病の事

口 麻疹のる 九十八 秋ならんも 三千記 とりらすもの新
いけそ かもきかく 宋代へのけ
ゆとのをうり 存せしと魂をとり
云ハなやうしのはくちうあるる病まて
藥もきうぬとや佛はり

拾遺 眼病所療の事 十一 眼病所 大事とし以
もと唐よりけらる時 清くと清 の
まうらへまかて見えとはてるも其る時
眼氣よはりとさひ葉しぬ時ちよと

先人しも痛み目には物欲はしくて
近そふれ是欲やかくかや
痛み息くくみとうかし病を知 巻一 二百七十三
脚気かかき 脚気升半歳 身欲痛の息を
かきして痛みと見るや

近
小童時の 巻一 うやみ物を
て海のみや 此秋多し
梗の味 梨の味 竹の節子
枝段 百廿七 内外本朝
胴気又は内部とみへは毛欲して
竹の節目に見や
定家 二百六十又 たし 痛み
此のとそうき寒息とん欲へし
胴気は薬なり
梗の味 竹のとふうき 海のみを
識とおもし色用は時分と記
しも見也

一 枝段
一 痛の 百廿八 記とうの 寺院より一節を受く
切目に見や 毛根すくむりかわれ
口
け痛をそへけとや
虫気痛 巻十一 十三 下部の 用には生気みや 經く
みや欲や生欲せんして人の髪を
抱くそこや かきをいうても ぬらくして
根よそうけれ 根気の虫退散すると
口 二百廿六 根いうして
口
みんげく此香 十二 悪気取り 悪気は薬や
遍
痛と口 江の巻
定家
痛と敷の 巻一 うやみ物を 口論をと
二百六十九 うえ虫の すりし筆や
口
小児たり
風は 二百二十七 たし 痛み 痛みを飲むたりの
まえ風気を 小首清なり 此毛と知らく
薬とうとや
悪此をうて 猪とく 二百二十七 茶うひ 牧痛みを

置かはかれにまかせして[illegible]や

元文
青葉 少将[illegible]十五 秋の蝶は 薬師寺といふ事を
とみく鏑[illegible]まかせて久しき[illegible]とひ
[illegible]すゝやさし[illegible]手や

桜段
すき湯 [illegible] 無は[illegible]の [illegible]の[illegible] [illegible]
物[illegible]それを[illegible]湯[illegible]
け[illegible]の青葉の毛の[illegible]
けれ[illegible]身は[illegible]通りて[illegible]
[illegible]や[illegible]の湯[illegible]

元文
いき[illegible] 百[illegible]も[illegible]人の[illegible]は[illegible]
つ[illegible]猪の[illegible]とつけて[illegible]

口
堀[illegible] 百[illegible]の
[illegible]めて 二[illegible]
ま[illegible]の[illegible]て[illegible]
[illegible]つ[illegible]て[illegible]

桜段
蝶[illegible]七十六 [illegible]蝶を[illegible]

ほ
とみ雀 [illegible]二 [illegible]鏑をとらも[illegible]
[illegible]は[illegible]とも[illegible]
[illegible]七十八 秋の田は [illegible]雀と[illegible]
[illegible]とみて[illegible]や
[illegible]

近
[illegible]は[illegible]二 鏑[illegible] [illegible]
[illegible]とも[illegible]はまみて[illegible]
[illegible]は[illegible]山[illegible]
[illegible]の[illegible]山[illegible]

口
[illegible]尾は[illegible]
[illegible]とを[illegible]
[illegible]尾[illegible]とい[illegible]
[illegible]や

口
[illegible]尾
又[illegible]つき尾は[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]白尾[illegible]継[illegible]の[illegible]

是又菫山の花をもて詠ミしこゝろなり
ましき秘抄に書給へしを思ひ出せん
との事侍や　昔一条院の御時西郷に
詠て申されし清義座を年々に継そ
見けるとかや
後京極二条殿の一条院御時の節会の
時詠る花山を思ひ出して此題を
されて源政頼に上座を二間切て
田舎に居られし継たり詠る座のよし此
志ろきを代々まうけもれしいまさ当
のきんわり御門帝御当の時政頼に
二間此白座の当は是うち○見ゆる其から
て我らしかれとも白座にも継やうてわ
此座名しんにて継や
後京極又詠る此ま其春とは申やらあるか

わきたて白座を継て書の当所新当
ましく思ひせんかや白座作るにまたハ
詠め此白る此是まことはかしこ綱
二間を清く
宝永八年辛卯　継座まて書まてを以
而してなほ云
迄
綱吉公九已後し　詠るは綱吉の子とも云初かは以
如し次
綱吉と云し大納言卒てひらけと　詠るとこゝへかくのみ合
而時綱吉にし大納言く　大納言を
もとく綱吉の年足くてし次
後京
詠る清和くく四十二首書出　大納言し此家
そ以下　又合せ侍りし思ふてなき以
芸能
經備ニ年　六年　依藤なり
日
綱吉ます　九年又　書卓の此

口
評判　九十七　其の批判
露沾先生御判
ていさみ香なれしてもおもや　大方は其のかす
まれ結の味を知せて浅からぬいかさへ
みくつりてや大方の好の比ぬ捨つ
ぬりや口古半八ふう能り　露沾先生の加
と云露沾に知ゝし　府浦思て
水の流とむつまこれ越つまれ候
ところ心ありて仙ナけ何をとめて
野とは出候
秀風露小知を好む好事　八十　大露沾に墨跡
御ゆし見てんは何のかをかく扇紙
つもひかゝす家の子すなりり其様
皆ありたゝれれ事開なされいかり
つらり猪なくつるく簾はなり知のこと言を

許らんせん言れく千味ち知命は世元
つらひ給てとや
口
銅釧弟らし沙汰世海に此事　八十四　思をなひて
好さんの露之通常ですへは露まへ大さき
いかとにいふりに銅も方く好のよ
沙汰のれとつく露沾をそこ其好り
梧段
露沾風初つる事　九十九とても　相常の色
ゑ早盤なとくいふ廟ゆふく　あつまて
毛ゆつくへこ其はむすへし
口
嵐ゝ毛銭むせ好事　百四十四　嵐には　露沾
口
秀紙便て識の事　百四十　有して露沾
其好也
相常弱くいふは秀を候て見るへし
早盤称さい秀松の紀とよりて露る
つまれなつく　無判つく旅え　てな事を

おもしひ相似合てあそひとゆへり

口
風そよ紀州日本深野よりて此年夏まて 風そよく

同前や

拾遺
野よ出る香日用ゐ此事 二百三十二 席此野小

野とて此ん花月と八すりし雑をさらしく

実躰の雑をとかへ之しし 日百八十着衣を

雲本すき済しきタ暮部とにいそれ何も

とのや

近
まつかす 又 雪のつも

西国七十一ひとそりき 師の大前と合わせ云

御く大前此手勢しとに師くらの字よ

蓋張六十七 まき席を 日八十五 転あく

拾遺二十二 手勢の 多く殊し此附を年て

多はいつまく 早髪の紀志より

口
まつの切ち 十二 よ條へ 詩けるて右此道の全て 廿一

子席とと詩けるに此なくひまて帰く

成り所くて合年し見本とは的席

とこ

詩けの事むし 梵野の継八冬秋

まるく足も云所まてに後之ちそくすの席を

師殺しけ右此るや 甚時詩けるとて

出し彼此ら彼とそ給けるとめん今ま

ふそ詩けりて御らく何ら席部との方さいり

前の紙を分子すいに詩けるの合主へ母すく

師くより用之

近
狩場 十六 あけるみの新 康猪を攄とは攄場 又其

かりとしと云よる 席によりかとハ席

場とにて くきや 又席ますれ紀志の由く

今まる部とく云ハ 田の地此事や 山ふ

よ紀志ろとと云事ハ 足二てし寸きいに席 家

ともなしとて鶯なく〳〵小野なれと
今日も志ろ〳〵なし　露深き沢一初音て後

後京
一初音　四季ひとつかり　本ゐを頼み比入の日
とゐり

西園
小初音　四季七　日細かり
切そむるそのや

去けり来の新　山ほ初音のなをせこと
初出ていふの八康熙を称する志
なのゝ々初音志ん　とハ下初音流と云
とよみや　個初音も　旦暮させこ
流と中什来の訣

近
志ゝ初　去

日
下初の志元枝とと川事　日右　初枝のと引く祖ぶ
凡云無きや　初衣去る新入る初を詠
ひとも延喜の御字の御時も出
十二月と　交りあり

近
初声　去　去けり来の新　山ほと初音と式正な初声
初遊より志そなく庵下はなれ次第く
ふいひはふつて山の出し迄てと右山ほ
河ほ此者て　初音又山をと川なて
初音初音と初音はて附なな初音下ほ
とふりなると又野隠をはりとしいふて
初声四季の細子かまおく　初つきてと
初声なく　初つ八ゐると云音や初せて
初音も　初つくと云や　多つくと云わあり
四季声遠近て　細初なてや　去りく流なと
呼くけと云声八　初つくと云てなと
たなく引ゆのく　近て常此とし

後
山初の声　六十二　青なる
定
去声　百一　三季紀

近
たゝ山去て山　寄ほ引く〳〵宜く　たゝ山八ひたすら〳〵初音や

日
河紳りかけ　日
海声ゟ八頃て初音なり
山の表義と一宮く初をと又馬坑

此所十八ノ表 夕かの洞り山

迫 よひら多 卒九 よひらは 障子に書たる文句なり

蛙人家のなし語る人相もとく

ひらけく見えて花をもちて高く

本歌の心をうつして語る人と名所

それの姉手ひなりへし

おゝ 日 並ら子 四十一 並ら子 語りと手紙縫ひつくる

なりやと語りとはいふ

なり子の洞りと白編れ新文字

ともいふ

おゝ 並ら子 並九 並ら子

おゝ 日 西国 四十二 夕 うち添へ

又舞庭海野にはる也や

日 雲細くなりて 八十一 むかし

おゝ 夕の洞り山 七十 辰して 表の洞山と云 次

近 落草は高 十四 語るにして 近き花をふかしやあらし

なひ熱気とさ海して

自然にたゝ襟を落をたす

日 うつき山 二十五 並草を花の落をとりと

なり吾山の樫樹を切者は剣して

門羽 高落る 廿六 高根と 次 これはて 語を待ちや

又語るもつゝぬ高は遠く行て落るも

門羽 高おしき 門右 高低追れとするなり

日 きるんきうき 廿七 落草や 遠見ん花紀伝し

門前 文

西国 遠見ん 三十四 とさけびの 高行つき山ははなり

人を見て高語は行方をうかゞふや

定家
左目 三十七 … の 遠見京也は左目といふ
西国
れかえ 卒の 遠見れ花を持るに左
らす … かりといふ
後京
鷹かさす … 花草も 花草 … 鷹
さすなり

門弟
物部し

九十九 … 鷹 …
西国 … を … といふ
… 鷹師も
… 鷹 … て
… 川 … なり
西国
まろの家 八十 … 家 … 山を奥に入
出川 入川 … といふ
拾遺
霞よ … 三十 霞 して 霞 …
… 御 … かぎまし …
… は鷹 … を … 放
てしなり … 鷹を … 霞 …

おく
近
神 … 将 四十 … 鷹 … を出し … 山へ上ケ
… なり
… 鋼 … や
おく
口
朝鷹 九十九
拾遺
… 鷹 … 音は … 聞 … て
… 鷹 … 百三十三 … 朝 … かりて … に
… 力を付て …
後京十九 … 鷹 … つる
… の …

おく 西国 十一 霞 …
おく … 卅六 …

おく
後京
… 将 … 人の … 将 … 口 … 神 …
… を聞 … て … を
… 将や
西国 八十六 …
口九十二 …
… の

呼と定すあして詠のふといふとのさし
てなしぬやふして鷹をとす人よりて
待ちて合るや聞す人鳥ともいふや
祢とり特とはふしたる鳥と本鈴に合
脈り　なきいる特脖といへり

あく　○―

慈鎮　二うきんよ
定家又表山の鳥聞こもる呼る特のすゑ
聞す人鳥は類や

近
雲井をとけ承　定家　聞す人鳥六日戦さす
四十二ときうふよ拈　年ふ限りかねしする
とら無く年ふ深しむとすら附ふ釜餅をと
隠せも甚信そし人あるも雲井をとあり
まらるく　近来野鷹とて年をそらし人

近
さら紀鷹　七十六
さら紀鷹に　二つ鷹つらふ附さら紀よ合る年やし
掃はすく滅なり

日
あひ合　五十
鷹山ふ　ゆやおもて鳥一つよ鷹二羽合
ふ事なり大鷹をこ二つ合事あらしね数し
元合凡入らく　ゆやまちあり

近
口羽
招きりて返　右口拈
鷹あひ　五十七
鷹あひもあひて鷹し鳥しるのるや　鳥あひし
あひ合は鷹は延して
らいさ次

日
立のゆり鳥に合す　右口拈
立のゆり鷹ましくしゆふ
鳥くは鷹わしうさも由りはるを引きし人
く鳥の積目よ成附ゆさすみや　日六十六　立のゆり右口拈
ふ城つ者まそ寸附さいふ无ふ無く合出し

口羽
引鳥　七十八　たし鷹れ
鳥よ續をつけ海しね鷹あり
聞をさ遠て庭しく引ま事や引鳥にすはす
八鷹るよ人勢出来て嫌事やされしと無
海しねさ引鳥又いい者鳥を經路
みて是を由ひてとくせ投鳥なとして

いふ名は流しす　投出せは鷹の余居
より知らく　それもしらとすへかゝる
定家卿千一首なひの
近羽 すゝかくれ　七十八まし鷹の折　すゝとるともいふ也
慈鎮二つき人は　口十之鷹すゝて
慈鎮 手ふすゝる　三十五の折の人
口 すゝ鷹　六十丈すゝ鷹の
口羽 流しと執右口折　草むらへ名ぬしきを見小柴木あも
又草にも鷹名を心つきにさし
むすと志川ふ小よるとてすゝとるをいさし
とるとと云なりすゝとるとはすゝかくる
とも不老他ても大鷹をと流しとるといふ
庭しあくるといふに鷹の拾ふる
はすゝあくるといふよ草も少し前拾ある
庵さきまく　こゝも劉居経書に出る

しきまほ　流しとる巨細ことへつ流の也
近羽 流し抑ふす　七十八まし鷹の折　あし鷹は野きのまて名さし
柳をなくさ流をいさし抑すと云也
さしとの誤や
人の鷹をと来ひ来る流むろひ来るを
いふを鷹の道の口傳ふ中そといへり
又う拾ふるをそらすもと云すハ隼ふ
いふ祖なり小鷹にハ差羽をそらすと
云とみて来り大鷹鶴以下小鷹にも
そらなるへし　隼差羽いあらく乱
来るとハいま流　それる拾ふしたる
と云す子細ありし　流之
かまほくく人のかけ来る海の小来さぬ
鷹まいつき毎ひとつまいふく夢くあり
流くい庵して　隼あ傳の家ありこそ一冊
口羽 鷹ひろむくる
口羽 鷹そらす

まそらし鳥ハ白海青ひとつ有中にてまき
れしの轅鷹にて成ましたかさまし無
大鷹鶴なとをとるといへりすく
なり

近詞
鷹とたりしろを
又鷹をとりし鳥の迹とるといふに鷹に
入たる鷹の羽を出すと紀元鶴し鳥の迹を
迹しまたる迹てたるといふあし鷹ハいま
鳥元かたる鳥なりぬ鷹架をもひる智
まだ鳥との手は無りしまたる迹てたるまて
まへまたる籠鷹あし鷹同前歟 又いふさ
るし云詞にて是草にありをかりしときまる
といふ 鳥屋よりも迹てるハ鳥屋をとく
てもに迹てるともいふならしといふへし

定家九十三 鳥をきく
よみふ見失ふすゑ
見失ふとハ
鷹詞よ
わし手

近詞
こゑみいまし 九十六 雑にまた 他流用否

なしと無ハせかいまといふるをしそれ
せめいまとはいへ鷹とはいふ 彼
諸本折よ注之甚と小鷹ある 鄙なる
様小鳥を流く退雲賛之此空へ
まきあけくするとハ此かまも鷹
鳥とを責てるといふす鷹詞や
鷹鳥をとるて心いさみく鳥をもむく
思ふ毎に志て心わつふ鶴たなれと
かるく責るといふ詞非如意歟 こゑみ
いまとし云詞当流や

近詞
無ごふ派 九十六 雑にまた折 鳥は久しく天をねよりとめ

日詞
肉つき鶉よ合る事 八十一 いつハたゝか
みくやしなる事や 手の肉を去る鷹之
鶉此ふし 鳥ハ
とて付く鶉小鷹に合る時習ありそれ
此志て様を此十文字に投ちる事あり

後京
鶉将 十六かり立る 春駒は若草にうかれけ廻
し輪をかくるや 鶉をぬすみせし
となり

日
駒を志川に鷹合す 十七 春は野の浅草は鶉に
ぬけ川に物くさまさえ 駒を志川に
鷹合すとや

西園
怨鶉 六十九 秋風に 鳥もなく鷹はすべく
なるをうけて合るや 日七十文 きちあ(?)

実家小鷹三むさし野の
実来まてかる上まて
鷹つる鷹の声ふく
鳥をとる目頭(?)らし
といふ木をあてく（?）

日
一よるも 三十二 くれし哉 只一夜や 始て鳥をとり
あるなり

蕉伝
蕉絵廿六 うまし哉れ

蕉伝
いけ鶉 日八十九 きさきた弥兵（?）

実家
鶉のかし張羽まさす 十文 秋の哉れ

西園
日次の鷙 四十一 百十三や 鷙をはえらしいふ

西園
神無月 七十三 笠は上に 鳥をとる羽毛背の
雨覆ひ 吉ざ毛 尾のこよ 嵐乃末く
云草は こくなる毛を 掻く山の 綿を見立

実家
諸方は鷙鷹 大鷹小鷹 いろきまあるを

日
日次の御将 八十二 とや出す 葉物らし は 諸方は御将に牛
未は日をつるころさ 様も 平人の将に

日
廿日ほど 深山り それを日次といふ

日
山日鳥る 百三十六 男さとさ 近てもてよ 藤と見えて
鷹の合せなくし 紙方参りては 生井に
くらの名へ日男といふ

日
鷹之暑を智化事 小鷹五十三 三九月の 雲井庭に
合すして 只すへ所りきて 鷹に暑代
知習りても はつるへしとや

近相
めん鳥つき 廿八 立く掻く 鷹は沢まる 四十之 めん鳥を

とまはいろ程とゝきて雄ふれゝ衣く
するとふ侍るや
後京十八んる歳さ　早鮮の記に鶯表ハ心あん舎
かけくなりされ　口鮮を詠すれとや

近劉
もかりあ　宗匠三之の句る
旅の立の句ゐる比深き

定家
鶯簡　八十七　春中末の
攝政
寝覚をおゝく鶯と稱　百首二ひとよつ　竹の林
なりくて鶯比寝ゝるとはいらすして
一節つく竹を切のけてひきくなりゝく
鶯ゐとまてとや

後京
出殺の鶯　廿八かくまや宗　葉鶯ですゝとにて
何としても花のさまゐを鶯ホと子
唐義中くよ見種る以良いろ子も閑さ
旅かり出ゐ葉比方へ教をたる経て

花多や
定家
葉さるし　夏　御山木の　栗花のして　後髪
頼ん　みつをとん如く　ゐくゐ
攝政
みふ親くる　二十五　宗鶯比　鶯ハよの多きとかハ
て銭宜比吾物を詠ても乃り乳
稲多く
後京
鶯綱　早三　月御を切　多飯を波存の入比
かふ切結ゐ花く　多飯稲まゝ綱たる
定家
綱たる小鶯毛　綱ゝく　蓑乃鶯や　鰈の子を
柳とりまて乃や
同
宗鶯比柳とり治ゐ　百六八　山とり比
条ひきゐ鶯比事　宗匠　秋のとし　夕ア西北
西御紀へし
同
志の子のとまや　宗九きし　鶯の　鶯比をれく

とりの附辭にハ何とく大鷹にハせうく

喜家 ちい鷹之文　小鷹之事二ち記すべき

同 松の枝にとまり付る事之　此外備や　名あり

同 藤蔭ふ小馬鞍草ゆくを置と付る小鷹之事二称すれ

同 事八古江の　森れ葉をかりは鷹き

わこに持れ枝とそへてこそや

同 松枝梅にとまり付る　事八松にそや

同 鶴にて付る　小鷹八　其上深き　遠山見え

猶段 節ふれ次の日鷹飼の方へと語る　事八志ろくさす

同 笠　百八十九之事　鷹野中く鷹遠ハ笠と

其ぬや

同 泉星　事天の河　鷹遠のうりよ紙いふ

同 かの枕　百五十之書れ　鎌倉れ名所あり

鷹ところこしもかし河へ関守て

緒て鯛を求めしむをしけ濱なり

捨りりしとや

定家 鷹とれへ藤の附の事　百八条鷹れ　中にえん

落つる河も千ふく　河るすし毎

加茶郡ふく河るる梅そしや

嗔鳥犬之事

日本逸史巻三十一云弘仁十三年十一月壬午霎雨癸未降雪是日
先太上天皇先御冷泉院次御神泉苑放隼撃水禽天皇献御
馬四疋鷹鶻四聯嗔鳥犬及御屏風種々玩好物云々

世をもさらん人へ近きもんへりき　[illegible]
皇近て能ん
同
おほみかり　九十一　よしくも云所頼伊や鷹は狩かり
なをといひても同し
同
ゆる　八十　よそはる　爲も我も受て西前き九切の[illegible]
たくしるねおなの葉は蒲きあまは何[illegible]
隠まてみ比本菓つ吾て大宣を云
鼻まかくまれを知飼色近てつんかって

近羽
さ川物さ川　六十二鷹毛草　鷹たちる一度に打入る草
鉞さ川物さ川とさやは於さ海り哉
左あしてこゝろのまゝに如くハ放つ庭
ゝゝす

同羽
さつま瀬　七十九兄弟する鷹も見る所を見くく行え
むくすり時鳥にたつさき、兄弟てある
流れつきぬ筆やわさへ止すさら
世をもさぬへ迄なんも志つねん都を
止まてと能ん

同
お比ゝみかり　九十一年くしくも　六臣類仲や鷹は揚ゝり
なをといふて同し

同
世も　八十年くては鳥　鳥も鷹も晩の雨なる切の程
右りしをねらる葉は崩き世よ行くを
隠まてと紙本巣の当て大宜を見る
巣よかく来をそ知飼るはてつんすて

ことしするや

おとゝ海 八十四 訳は左り 数志けしあしらふていふ哉て
かるとはいへ おとゝいふ事や 又鶴を知ふ
ふりせしつる亀の鳴と鶴ふとしてせんと
思ふて鳥をさし たはらくいと行過ゆく
下野の志らむ鳥のうへ川されをそれなる
けて過ゆしと覚えてむ物となりぬ
よくみて鳥をと亀にいふそは鳥を
ひとへにといふ義なるへし

近桐
物香 九十五 物香にて 鳥は左り鳥の海を鳥異付
鳥なり

日
のへ招く 口右 左りたる鳥はとく 海をして
訳かむむすや

日
かむ木 又左りは 鳥の海に異つ出て見ん行事ん
西国
異川と記 卒之鶴は生姑 かこはしむるを

近
こ海口と海記 六十四口 此 いふ鳥左し訳さ亀左ん鳥々此左ちへと知
左しして進へつぬや
定家
西国
異付かぬ口手近左し鶴此 かみつぬすへ
かとすきゝふ 十 えきこし かとゆむや 木姑む生亮
あしぬへ 善悦 左九とらつ第ふ
訳左りまくつふ左り 近海此 知ふえさうて訳之及いす 口五十八左し鶴此
鳥も鶴もくりぬをいふ

日
ぬるつる亀 七 鶴左り 年姑りて鳥をといふなり知る北
いつり牡丹をいふえうとらもいふ牝丹をとは
をつる亀とや替りせり 又えぬる也いふ
鳥をかへてと云は清へし言事や古訓はなさ
訳る海よりる鳥姑鶴りてつるへとや
愚訓 古つる亀は籠に入鶴せて鶴を
るをつる事や気をひられはよるとおは

は　こと葉とひ　五十八　えらし讃　かなはめくよりく於り　於讃をえらしつきてえ　なをなを
くらふ
迎　かこすり川　五十九　特人の　かみゆむをとらふ
日　山於らす　日君　世ふ本しお於ま　い生頃をせん本る紙
　於網枝をお附布まより膝をしそくひ
　より称方比家へ許さを義なしかけ
　こと紅をといふ
迎網　菊ちゆる　九十六　拙者して　かこちらへてる事や
日網　庭之川　日右　久しくつるさく生てる於在るにまる
　かみらく　ふまてふゑや
日網　はつる　日右　をしつきてる比をく　かなまくさら波か
　まかみなよより鳥てぬや
日　枝をさ付　五十九　特人の　あ比旅をと枝ゆく　枝ひさしする
　あらく於まるるや　迎而比於いゆりて

日　をし一枝　日君　ふはくをしをもあをとふるや
迎　於かえ　むかひの山まある比旅わるを於須守
　津みゆく枝めく　鶴のまる紅枝のさをを
　こんそあかけ　ゆくや
九十六　あかて手拂　旅華性まえんとてもある
　つる多てる我をえ遠くい高すり柱と排
　をらして　あそとゆる事や　日九十五たくしてと　定と
西国　すめく　えん於くや
　十六　あつ前く　ちるえてと於のえんてるや
慈眼　大乃新网の　五十八えし鶴の
日　於のふまひ　九十六えし讃の
定家　大網　八十も　まふ山の
日　ゑのこ本　八十一　をし讃の
日　於の七ゆり　八十四　秋の日を　ゆり絶として　鶴まるるえ
　七ゆりい春まく　志於

定家 わかれち 九十又 わかれちの

器

近 [illegible]子 八 すこさし [illegible]のかゝみ[illegible]もの[illegible]

日 [illegible]し[illegible]す[illegible] 九十二 [illegible]の[illegible]らすゝなり

西園 [illegible]の子 九十二 [illegible]

日 [illegible] 早十二 [illegible]

[illegible] 八十四 山[illegible]

定家 [illegible] 九 [illegible]の[illegible]

日 [illegible] 九十二 [illegible]の

近 [illegible]緒 十一 山[illegible] ひこの緒もいかや [illegible]ひこのを

青き[illegible]しこゝろあるやうに[illegible]

[illegible]まいり

定家 百之 よのすかへ [illegible]をつゝむ[illegible]なり

日 みゝれ装束 日[illegible] 小[illegible]に[illegible]し [illegible]

[illegible]よすかや

遠
かしら紫衣 十一 山階寺 かしら鳥は羽しろくして頭黒く猫鶴
色なる毛をとりて衣は紫に付家
なり
拾遺百首 八 かけすゆる紫衣草をそめし
大かたはそれとしらるる小衣にて色かく哀なる
定家
紅葉紫衣 八十八 秋山の紫草よく紫の錦
をいふ

日
をしら八 千七十首 たまもね
定家 十二之 鳥羽院 日小島之 初逢く
後京
をのこ子 二十一 としはの 大緒の事や 日 千六
同緒の事
日
御緒 千四 月やとらしひ わかきの親王 御緒
さみすれはむ前や 日 九十二 清水の
拾遺
御緒をぬく 千又さこひの称
緒をぬく事のありと見えし門をは
こゝにしるせし

定家
山わけ緒 百六 わけ行の 菅縄ゆくさきすをいふ
行ゆく髪姥さす
西園
経緒 九十六 かる萩の 経緒さすとは 結る也
日 七十二 こころ定家より 色をぬきて むすびて その日のちりしを
定家 九 日 伊勢
日
庵志り 又 世の中 二十 緑や 南流 八 二十一 尊
慈鎮 十 世外年
定家
経緒あり 九 日
日
経緒筒 十二 萬物にて
日
経緒ゆけ 十二 清し
拾遺
世の緒 二十一 引 庵をとれ事や
日 三 百 十 中院を 頼る清く や
西園
さゝき縄 二十六 かる萩の称 大かたは経緒や千尋
定家 百 あしたを

追 鞦 十一山谷抄 此流の鞦韆ありけり

日 鞴袋 宇二十二 忘れては 蕉 宇十四 杉人の 笠鞴をこそ入れや 鍛冶の師を

西鶴十一 鶏の頭鳥の首をはつる むかしは鍛

小刀をとぎける松実たる針も人に分ち

ひとつひとつはりわけせしや 同十八 忘れてけり

蕉 廿二 忘れても紅けり

定家 鞴袋さす寺 百七 とりかへもせず 鞴袋をはかすといふ

日 架 十二 山谷抄 鍛冶は剣にて 鍛冶屋の師あまた

桜段 袖をかけし 百十六 霧の竹は このあたりの鍛冶

衣 柳に掛けて袖とのえところどころしあたりの

の鍛冶と返し侍りけり 柳の枝ならば須弥

せきあへしたる柳の葉をかざし 柴にも

柳とあり

定家 架にかかる 百五十 かり衣 春は梅 夏は柳 秋は檜

定家 架布 百八 わかれ鍛冶 架布されたるも 家の紋所 冬は杉や

蕉 ひねり 宇十六 とらん縁伴りに ひねりするといふ

定家九 秋の野に 竹のさきは人のかけに

よる衣をさきに がはさして 馬上

より鞍をとりて 衣掃かや 小鍛冶二十二

五十鶴の ひねりは縁ある枝かな

西鶴 なまぬ 宇十六 ねりには 鍛冶が時ぞや 鞴に年

定家百二十八 わかれ鍛冶 こぞ方は切れけり

桜段 衣かけ 二百 わかれ鍛冶 衣かけさしとい

定家百七 まくらに夕べに姥をひよ 衣

ますかりもの鍛冶は 手かけの鍛冶まで

そもかかる棚の星ぞや

定家
鹿袋 百四十二 [illegible] すゝしや袋へ
ことたし 二百七十二 従人や 大猪まりと [illegible] と云
ことのわり

西国
将枝 二十又のゝ毛を奴 鷹近江笠ぬと御りよ
よしへて切

在段
あ紙 百八十八 雲行くまし 篭や

同
笠之 百五十二 [illegible]

同
婦女こ二百五十尺ニ渡り鳥や 鷹の [illegible] をとへ

定家
鷹綱 百五十八 山鳥の 同小鷹七 綱とて [illegible]

定家
とち枝 [illegible]
いや袋 八かふ野より 晩まかちんとて生て居
[illegible] と袋より [illegible] 一羽いけ鶴

近
紙の月さ守 又 [illegible] しのの枝 [illegible] も木の枝を
[illegible] の月へさし [illegible] の [illegible]
ますゝ [illegible] 山 [illegible] 也や
木の [illegible] いかへ [illegible]